

海 (かいし) 市 No.5

● 詩

02 横山 仁 生活の柄

05 前田 勉 ツナガリ

● エッセイ

08 片津 森 ロートルたちの梅雨明け
登山

14 佐藤ただし 水田とツバメ (3)

17 横山 仁 雑記 (5)

生活の柄

横山 仁

《そんな夜は 時々

五人の身体を敷いたまま

眠っている夢を見る》*

アラビア語を話す「五人家族」の親族は

たとえば パレスチナ人だとしたら

経団連（軍需産業）の営業の abe chan がイスラエルで商

談の夜は

爆撃を避け トンネルで眠っているのだろうか

湿度 100%

フクイチの放射性水蒸気に包囲された

むし暑い夜

猿ぼくさんは

死に体の abe chan を敷くし

ウチユクチイ 空虚な言説を枕に眠っているだろう

アベノミクスで国民の年金が短期間に10兆円も消えようが

「福島***県の小児科医会が甲状腺がん検査の縮小を要求！

癌が沢山見つかって不安になる人が増えて」いようが

(2016/08/26 情報速報ドットコム)

耳が遠くなった母は

読売新聞をみながら いつの間にか いびきをかいている

多忙な あたりまえの夜に

余計な問いは不要ブレイク

と 寺の老典座てんぞは言い放つ

とりあえずの朝

一杯の「無薬育ちの天然味 あらびき茶」から

老がはじまる

(よつこらせ)

* 成田豊人詩「^{スバ}超同棲時代」より

* * 「ハマスのトンネル建設」を「貧者の武器」とかい
た毎日新聞の大治朋子記者（在イスラエル）を、天木直
人氏は「無神経」とよんだ（「天木直人のメールマガジ
ン」2016/8/28）。「トンネルは、石をなげて戦車と戦
うしかないパレスチナ人の抵抗と同じ絶望的な抵抗だ。」
ちなみに、イスラエルのガザ爆撃・市民虐殺の国連非難
決議で、「国際協調主義に基づく積極的平和主義」の日
本は「積極的に」棄権している。（2014/07）

* * * 2016/09/03の福島県双葉郡大熊町^{おひぐら}夫沢三区の放

射線量は11.834μSv/h、年間では10.213mSvとある。

（2016/07/12 現在帰還困難地区）チェルノブイリでは
5mSvで強制移住。

ツナガリ

前田 勉

そこ

という

あなたの位置や

ここ

という

私の位置

それぞれがそれぞれに在って

思うことは続いていた

昨日まで無意識であったツナガリを

遠い記憶からかき集めると

湿った空気は震え

戸の隙間からすり抜けてゆく

時間

の

断続的な擦過音が

室内に響く

深さ長さ濃さ重さ

それらを感じたのはいつであったか

問うことなく問われることなく

すべて過去形になり

意識された問いは

始まらないまま終わってしまった

繰り返し

繰り返し

繰り返された

新たな蘇生

の朝

あなたはあなたで

わたしはわたしでしかなかったのだ

生きてきたことや

生きていることの

ツナガリ

で

物事は何もかわらないまま

いつものように流れている

ロートルたちの梅雨明け登山

片津 森

あさって水曜日の太平山登山は一カ月延期した、と野田さんから連絡があったのは六月下旬のことだった。同行する予定の西藤という人が、奥さんから「平日は山に行く人が少ないから、行くなら休日にしてほしい」と懇願されたための日程変更だという。

五月は、秋田や隣県でクマの目撃が相次ぎ、過去最多になったと報道された。鹿角市十和田大湯ではタケノコ採りがクマに襲われるという事件が続発した。山中で遺体となって発見されたり負傷したりした。十日間で三人もだ。六月にも一人が死亡し、付近で射殺されたクマの胃の中から人体の一部が見つかった。凄惨な話だ。私がよく行く本屋には吉村昭の「罨嵐」が積まれていた。そんなさなかだから、西藤さんの奥さん

が、土曜、日曜と違って平日は登山者が少ないし、そんなときにクマと遭遇したらどうする、と心配したのだった。それは十分理解できる話だった。

当初は野田さんと西藤さんの二人で行くことにしている、私はほかの予定で日程が窮屈だったので保留していたが、一カ月後にしたのなら都合がいい。そんなことで七月三十日土曜日、野田さん宅付近のスーパーの駐車場に、三人集合することになった。

野田さんは自宅からトコトコ歩いてきた。一年ぶりだが元氣そうだ。西藤さんは、広い駐車場の中央に停めていた車から降りてきた。西藤さんとは初対面だ。歳の順で言うと西藤、野田、私と一歳違いの年子みたいで、最も年少の（といっても六十代後半だが）私の車で向かうことにした。

野田さんは若いころ、職場の野球チームではピッチャーをしていたが、そこに転入してきたのが西藤さん。ピッチャーとしては西藤さんが一枚上とあって、野田さんはエースの座を彼に譲ったのだった。それから三十年。定年で退職してからは、西藤さんは野田さ

んが勝手に作ったバドミントン同好会に出たり入ったりしているという。

そんな話をしながら市街地から田舎道を抜けて車は林道に入っている。仁別の林道は緑が濃く、蛇行を繰り返しながら、最奥部へと私らを導いてゆく。野田さんが言ったように、途中、ほかの車は見なかった。春には路傍に停めた車が山菜採りの存在を知らせてくれるが、今はもうそんな季節ではなくなった。西藤さんは年々難聴が強くなってきたといった。普通の大ききで話しかけられても言葉が届かないようで、周りの人には面倒をかけている、と行って笑った。運転する私も助手席の野田さんも、後部席にいる西藤さんに話しかけるとときには、体をねじって顔を見せて大声をあげていた。

八時半、登山口の旭又駐車場に到着。トイレや身支度を終えて西藤さんを見ると、何やらへんでこなパイプ棒を持っている。長さ一メートル余りで片方の先端部を叩いて平べったくしている。その鋭い先でクマが出たら突っついてやるといいうが、まさか、とてもとても。それに、その短さではクマの体に届く前にやられ

ちまうべ、と私も野田さんも笑った。西藤さん本人も自分の冗談に笑っている。そのパイプは、用済みとなった物干し竿の一部を切ったものだそう。んーん、古くなった生活用品をただでは捨てない心構えとみた。

十五分後に旭又駐車場を出発。岩だらけの路を歩く。右に折れて平坦な路を行く。路が湿っているが昨日雨が降ったのか、いや一昨日じゃないか、などと不確かなことを言い合う。旭又沢に架かるコンクリートの狭い橋を渡り終えるとき、下の沢のほとりに捨て置かれた赤錆びたレールの残骸をみつけた。やがて路は左にカーブして、昔、杉を運搬していた森林軌道跡の緩やかな坂を行く。以前は朽ちた枕木が見られたが、今はその姿も残っていない。さっきのレールはトロツコを走らせていたレールだったのだろう。頑丈な橋を右岸に渡り返し、左にカーブすると御滝神社に着いた。ここまで三十分。

西藤さんがクマ除けの鈴を外している。ザツクの背面の左右二つのポケットの間に挟まっていて、振れが少ないためあまり鳴らないようだ。これをザツク背面

のヒモにひっかけるといいんじゃないかと、そうだな、ということになり、場所を変えてみると少し鳴るようになった。野田さんのザックには私が貸した鈴がぶら下がっている。鈴といっても、三年前に信州で記念に買った手作りのドアベルだが、こちらの方はよく鳴っている。

路は、右に左に折返しながら上へ上へと続いている。私、野田、西藤の順に登る。アヤマ坂を通過。御手洗みたらしに着くまでに階段の踊り場のような平坦な部分が四、五か所ある。ここでは二回休憩をとった。今日はなんとなく消耗が早い。汗が目に入ってくる。眼鏡にも垂れてくる。二人をみるとやはりびっしょり汗をかいている。やはり夏だ。気温は高くなっている（はずだ。暑いから）し、木々の葉がうつそうとして、陽は差しこまないかわりに風通しが悪い。

十時半、御手洗着。入れ違いに若い男性が一人、挨拶をして下山していった。広場には男女五人が休んでいた。早速、御手洗の湧き水のところに行く。柄杓にすくって喉に通す水は冷たくうまかった。持参したポ

トルの水を入れ替えた。五人はグループと見えて、間もなく揃って上へ向かっていった。彼らのいなくなつた木製ベンチとテーブルについて、西藤さんが、眼鏡つて不便でないかと聞いてきた。不便不便、顔の汗ぬぐえないし、雨の時も不便、と答えた。コレしてるんだ、と言つて西藤さんがベンチの木のテーブルに一對並べたものは小さな補聴器だった。これをしてると耳の中に湿気が溜まつて具合が悪いので、時に外している。小さなボタン電池が中に入っている。いつかオレもこんなものをするようになるのかなあ、鳥の声など聞こえないんでないか、などと思つた。

ベンチ近くの数本のブナの間立って上を見上げると、地面からまっすぐ天に伸びて、先端部が集まっているように見えるのが目に気持ちいい。春と違って梅雨時のブナは、灰色の樹皮に苔がついているものが多い。まっすぐ上に伸びているブナも、根元から間もなく幾つもの方向に枝分かれしたブナも、芽生えたその場所で、その環境に従いつつ、また本分を守るために抗いつつ生きている。そんな木を、撫で地蔵でもあるかのように、さすったりぺたぺた叩いたりする。自

分がつながっていたものから離れて遠くなり、山から下りれば、再びつながりの中に戻る。

そろそろ出発さねが、と野田さんから声がかかった。野田、西藤、私の順に登った。右の方にのぞいて見える空の雲がいやに暗くなってきた。雨が近いのか。

すぐ先の方から野田さんの声が聞こえる。きつと、先に行った人たちに追いついたのだろう。フアイトフアイトとかガンバガンバと声をかけて励ましているようだ。野田さんらしいと思いつながら、私も立ち止まって呼吸を整えている一人を、そして、また一人を追いつ越した。人が喘いでいるのを見るとわかにかこちらが発奮してしまう、なんとというケチな性格、反射神経かと思う。

辺りが高木帯から灌木帯に変わり、南側の展望が少しずつ開けてきて、明るくなった山頂の社殿が見えてきた。白地に黒で「七曲り」と書いた板が枝に懸かっていた。電光型の路を折り返しつつ登っていくうちに岩が多くなり、その頭を踏んでいく。そして、ついに空の下に出た。ヒバリが啼いている。旭岳分岐に立つ鐘を鳴らして空へ響かせた。

岩の路を踏みつつ、最後の急坂を登り切って山頂到着十一時半。山頂に誰もいないのが意外だった。駐車場にあった車の連中は別のルート上にいるのだろうか。神社（太平山三吉神社奥宮）南側のベンチを三人で独占して、ガスで霞み加減の太平山系の山並みを皆黙って眺めた。

着替えをしていた西藤さんが、ああつと指を差した。ガスが濃く広がり今まで見えていた風景を白く塗りこめていた。もう一瞬といえないなあ。この山はいつ頃が見ごろだろうと西藤さんが聞くので、春の連休の頃から六月までとか、紅葉の時期でないかという、野田さんも同調した。野田さんとは、若いころ、この山に何度も登った。昔、休日に仁別国民の森までバスが通っていた頃は、終点から旭又登山口まで一時間かけて歩いたが、春には路傍にミズバショウが咲いていた。去年は五年ぶりに一緒に登った。昼飯を頬張り、そんな話をしているうちにゆっくりとガスが晴れてきた。体を振じて眺める南の空の方でもガスが動いている。山のうねうねと起伏のある背中に陽が当

たり、ササのような緑も弟子還岳に続く路の影もはつきりしてきた。

私らの腰かけているベンチの脇の鳥居をくぐって、高齡の人が登り着いて、方角盤の脇にザックを降ろした。半ズボン姿でそこから覗く脚も太く、なんとなく山慣れしているような雰囲気を感じる。

神社の壁際に立つ記念碑や石仏の中に湯殿山の名があった。金属製の大きな草鞋が何足も立てかけられていた。それらは昔の修験者の行のシンボルだった。時計は十二時半になろうとしていた。神社隣りの山籠所の中を覗き見ると、さつき私らが追い越した人たちが昼食中だった。

下山も野田、西藤、私の順に下った。六根清浄と額の掲げられた金属製の鳥居をくぐった辺りで、後ろから来る人がいたので道を譲ったら、さつきの半ズボンの人だった。間もなく前方から鐘の音がして、半ズボンが私らにニコニコ笑いを残して下っていった。歩き方からして健脚そうに見えた。

前を行く野田さんのザックのベルトが、右肩から外

れて左肩だけで背負っている。時折思い出したようにかけなおしたりしているが、昼食の後だけに荷が軽くなって、右肩のベルトが浮いて外れやすくなったのだろうか。一方、西藤さんをみると、股の間からタオルがだらんとぶら下がっている。お腹付近のベルトにくぐらせているのだろうか。ベルトから外さずに汗を拭き、その後は手を放せばぶら下がっているので手間がいらない。しかし、倒木をまたいどき、あくあ、片方だけ長く伸びた端っこが倒木の表面を拭っていきそうだからそれに気づいたらしく、タオルをずらして両端を揃えてからまた歩き始めるが、白いタオルは股下で揺れ回っていて、まったくもって可笑しい。しかも物干し竿を再利用した杖だ。かなり締まりがなく、ユルくていいなあ。登りで休んだ踊り場に七、八人の若い男女が休んでいた。登りですかと聞くとそうだと言い、今晩は参籠所で泊まりだという。何時に山頂を発ったかなどと聞かれて答えたりしたが、山ガールも二、三人の男たちも、腰を下ろした表情からどうもへたばっているように見えた。ご苦労さんといって通過したが、あの人たち東京方面の話しぶりだったなあ、と野田さん。変わっ

たことがなくなると会話もなく、黙って下った。

遠くに聞こえていた沢の音がだんだん近づいてくる。西藤さんには沢の音が聞こえているのだろうか。橋を渡る。沢のあちこちで流れが白く砕けている。滴る緑。汗もだ。雨の気配はすっかり遠のいて青空さえ広がっている。そういえば天気予報では、今日梅雨明けが予想されると言っていた。山頂でガスが消えたところが梅雨明けだったんでないか。あれが梅雨明けだったんだよ。そんなことを思っていると、空を見ていた野田さんが「梅雨が明けたなあ」と声をあげた。

水田とツバメ (三)

佐藤 ただし

五月三二日。家から五キロほど離れた転作地で、大豆の播種作業を行った。転作地の大豆の栽培は水田に水を入れずに畑地化し、耕起した後にトラクターで大豆の種子を播いてゆく。

この日は法人の代表Sがトラクターで播種作業を行い、私が畦に立って種子や肥料の補給をする役目だ。

トラクターには三条の播種機が七五センチ間隔で取りつけられている。トラクターの走行に合わせて種子と肥料が播かれてゆき、何回か圃場を往復すると、種子と肥料が無くなり、二〇キロの化成肥料と三〇キロの大豆の種子袋を持ち上げて、播種機に補給する。

昨年、地域の仲間六人で「農事組合法人・中島スパーアグリ」という法人を作った。六人がそれぞれ耕

作していた農地を集積し、種子や肥料などの資材を共同購入し、農業機械の購入も法人で行う。また大豆や枝豆などコメ以外の栽培なども共同で行い、経理も一元化する。昨年まではこのメンバーで同名の集落営農組織というものを作ってやってきた。この組織は、個々の農家が農業機械の共有等でコストの削減や、労働力を補完し、稲作や転作を行って行く組織だ。八年ほどやってきて、県や市、JAなどの勧めもあり、法人化することになった。六名の耕作面積を合計すると四六ヘクタールになる。今年はイネを二七ヘクタール、大豆一七ヘクタール、枝豆二ヘクタールを作付する予定だ。Sはこの法人の代表で私と同年だ。

私達が大豆の播種作業をしている近くの田んぼで、手押し除草機を押している二人を見かけた。若い女性と男性だ。女性のほうは農作業に慣れている様子で、除草機を押しながら田んぼに植えられたイネを見て、植わっていないところがあると補植している。男性のほうは除草機を使うのが初めてなのか、要領を得ていない様だ。そこへイネの無農薬栽培をしているY君が軽トラックで私たちの処にやってきた。一〇年ほ

ど前に横浜からやってきたY君は、私が住む隣の集落で、使わなくなった民家を借りて暮らしている。

彼はイネづくりの他にお菓子なども加工して販売している若手の農業経営者だ。作業の合い間に話を聞くと、コメは無農薬、無肥料で、一ヘクタール程作付しているという。最初は雑草対策に悩まされたが、一〇年ほどやってきて、作業のコツも大分わかってきたという。近くで除草機を押している女性は彼の奥さんで、若い男性は彼らの知り合いで、手伝いに来たらしい。

除草機を押している彼らの姿を見ると、人の動きがゆったりとしていて、いかにも農作業をしているという印象を受ける。また、イネの一株一株と向き合っているように見える。

この日は朝の八時半から夕方五時まで播種作業を行った。

会社を退職して半年ほど経ち、田畑で作業をすることが多くなり、近所の人達とも挨拶を交わしたり話をするが増えた。近所の各家庭の様子も少しわかるようになり、それぞれの農家が力を入れている作物などもわかるにつれ、私たちがやっているグループ農業

や無農薬農業、それから各家族の実情に合った農業など、農業の形態は多様であることが分かって来た。

六月二七日の秋田さきがけ新報一面に、秋田市河辺で酒米や大豆を生産する高橋恒悦さんの記事が載っていた。高橋さんは農繁期を除き、殆ど一人で一七ヘクタールの田畑を耕作する農家と紹介されていた。この記事は、T P Pを参院選の争点の一つとして取り上げ、農家の立場からT P Pについての考えを取材したものであったが、私がこの記事で注目したのは、T P Pについての彼の考えではなく、彼が農業を続けている動機についてであった。彼は「集落の生活環境を守ろうとして」農業を続けていると述べていた。集落を維持してゆくために、他の農家が辞めた農地を耕作してゆこうちに耕作面積が増えていったようだが、一七ヘクタールを一農家で耕作するのは至難の業と思う。記事には彼よりも若い農家が、農業は割りが合わないところを辞めて行くという現状も紹介され、集落の農地を維持してゆく困難さが窺える。集落の生活環境を守るためには、一人ではなく、より多くの多様な人たちの力が欠かせない。

八月三一日。心配した台風一〇号も日本海に過ぎ去り、昨日の風雨が嘘だったかのように空は晴れ渡っている。畑の大豆は背丈が腰の高さまでになり、緑の葉が八月の終わりの陽光と風を受けて揺れている。

今日はSと大豆の防除をする。この防除は紫斑病やカメムシなどの病害虫対策だ。紫斑病やカメムシなどの病害虫による被害は大豆の品質に大きな影響がある。Sはビークルという防除機に乗り、一五メートルほどアームを横に伸ばして走行し、畑の中を散布して行く。

そのそばをツバメが一〇数羽飛び交い、虫を捕獲している。我が家の作業小屋から飛び立った五羽のツバメたちもこの飛翔の輪の中にいるかもしれない。防除に使用される農薬が与えるツバメへの影響を気にしつつも、買い取りされる大豆の品質を考えると止むを得ない作業だ。

ツバメの体はスリムで羽根はしなやかだ。飛ぶためのエネルギーを殆ど使っていないのではないかと思うほど、風に合わせて羽根を巧みに操作し、獲物を獲えようと飛び交っている。この飛び方だったら東南アジアまでだって帰って行けるだろう。

雑記 (5)

横山 仁

かつてテレビで見えて衝撃的だったのは、「天皇の世紀」(原作は大佛次郎、1967年1月1日から1973年4月25日まで「朝日新聞」朝刊に連載)というドキュメンタリーであった。(第一部はテレビドラマ、第二部がテレビドキュメンタリー) 最初に放送されたのは、1973年10月7日 - 1974年3月31日(26回)だが、わたしがみたのは、日本映画専門チャンネルの再放送[2012年8月13日～17日 日本映画専門チャンネルにて全26話を放送(初の再放送)とあり]だったが、なかでも「廃仏毀釈」(23回)と「旅」(24回)が記憶に残っている。(現在 youtube でみることができる) 「旅」ではキリシタン弾圧をとりあげている。秋田藩の処刑(「梅津政景日記」寛永元年六月三日 [1624

年7月16日]とか、いわゆる島原の乱(「ウイキペディア」では、寛永14年10月25日 [1637年12月11日] 勃発、寛永15年2月28日 [1638年4月12日] 終結としている)にみられるように、江戸時代初めのことかと思っていたら、幕末から明治初めのことだった。レポート役の伊丹十三が、当時のキリシタンが入られた艦の中からレポートするシーンがあった。この弾圧は「浦上四番崩れ」とよばれているらしい。

以下、「ウイキペディア」から引用する。

《浦上四番崩れ(うらかみよんばんくずれ)は、現在の長崎市で江戸時代末期から明治時代初期にかけて起きた大規模なキリシト教徒(カトリック信徒)への弾圧事件である。(中略)

1868年(慶応4年)6月7日(閏4月17日)、太政官達が示され、捕縛された信徒の流罪が示された。7月9日(5月20日)、木戸孝允が長崎を訪れて処分を協議し、信徒の中心人物114名を津和野、萩、福山へ移送することを決定した。以降、1870年(明治

3年)まで続々と長崎の信徒たちは捕縛されて流罪に処された。彼らは流刑先で数多くの拷問・私刑を加えられ続けたが、それは水責め、雪責め、氷責め、火責め、飢餓拷問、箱詰め、磔、親の前でその子供を拷問するなどその過酷さと陰惨さ・残虐さは旧幕時代以上であった。浦上地区の管理藩である福岡藩にキリシタンは移送され、収容所となった源光院では亡くなったキリシタンの亡霊がさまよっているともいわれた。

(中略)

1873年(明治6年)2月24日、日本政府はキリスト教禁制の高札を撤去し、信徒を釈放した。配流された者の数3394名、うち662名が命を落とした。生き残った信徒たちは流罪の苦難を「旅」と呼んで信仰を強くし、1879年(明治12年)、故地・浦上に聖堂(浦上天主堂)を建てた。

浦上天主堂の境内の一角には、山口県萩市に配流された信徒らが正座させられ、棄教を迫られた「拷問石」が置かれている。花崗岩の庭の飛び石で、十字架が刻まれている。獄舎では、拷問石の上に太めの茎で編んだ葦簀(よしず)を敷き、全員がその上に座らせられ

拷問、説諭を受けた。》

「旅」というタイトルは、この「流罪の苦難」からきたようだ。

けれど、キリスト教の布教にかんしては、こういうこともいわれている。「株式会社日記と経済展望」ブログ、2006年01月27日「キリシタンが日本の娘を50万人も海外に奴隷として売った事」より。入カミスとおもわれるものそのままコピペした)

《(2) 奴隷売買

しかし、アルメイダが行ったのは、善事ばかりではなく、悪事もありました。それは奴隷売買を仲介したことです。わた]まここで、鬼塚英昭著「天皇のロザリオ」P249～257から、部分的に引用したいと思います。

「徳富蘇峰の『近世日本国民史』の初版に、秀吉の朝鮮出兵従軍記者の見聞録がのっている。『キリシタン

大名、小名、豪族たちが、火薬がほしいばかりに女たちを南蛮船に運び、獣のごとく縛って船内に押し込むゆえに、女たちが泣き叫び、わめくさま地獄のごとし』。ザザリエルは日本をヨーロッパの帝国主義に売り渡す役割を演じ、ユダヤ人でマラーノ（改宗ユダヤ人）のアルメイダは、日本に火薬を売り込み、交換に日本女性を奴隷船に連れこんで海外で売りさばいたボスの中のボスであった。

キリシタン大名の大友、大村、有馬の甥たちが、天正少年使節団として、ローマ法王のもとにいったが、その報告書を見ると、キリシタン大名の悪行が世界に及んでいることが証明されよう。

『行く先々で日本女性がどこまでいっても沢山目につく。ヨーロッパ各地で50万という。肌白くみめよき日本の娘たちが秘所まるだしにながれ、もてあそばれ、奴隷らの国にまで転売されていくのを正視できない。鉄の枷をはめられ、同国人をかかる遠い地に売り払う徒への憤りも、もともとなれど、白人文明であり

ながら、何故同じ人間を奴隷にいたす。ポルトガル人の教会や神父が硝石（火薬の原料）と交換し、インドやアフリカまで売っている』と。

日本のカトリック教徒たち（プロテスタントもふくめて）は、キリシタン殉教者の悲劇を語り継ぐ。しかし、かの少年使節団の書いた（50万人の悲劇）を、火薬一樽で50人の娘が売られていった悲劇をどうして語り継ごうとしないのか。キリシタン大名たちに神社・仏閣を焼かれた悲劇の歴史を無視し続けるのか。

数千万人の黒人奴隷がアメリカ大陸に運ばれ、数百万人の原住民が殺され、数十万人の日本娘が世界中に売られた事実を、今こそ、日本のキリスト教徒たちは考え、語り継がれよ。その勇気があればの話だが。

（以上で「天皇の回ザリオ」からの引用を終わります）

わたしはこれまで各種の日本キリシタン史を学んできましたが、この『天皇のロザリオ』を読むまでは、「奴隷」の内容について知りませんでした。しかし、こう

いう事実を知ったからには、同じキリスト教徒として真摯な態度で語り継いで行きたいと思えます。》

これには、以下のような批判もある。（「新時代のキリスト教」ブログ、2015-03-03）

《キリスト教会の中には胡散臭い教会も多い。「日本宣教論序説」にはザビエルの時代に「日本人の娘50万人が奴隷としてヨーロッパに売られた」と書かれている。南京大虐殺「30万人」でさえありえない数字なのに、戦国時代～江戸時代初期に日本の娘「50万人」を集めることもヨーロッパまで輸送することも不可能なことは常識ある人間なら解る。》

また「太田龍・佐藤耕治顕彰WEB」（平成21年？8月26日）では、

《この記事では、鬼塚英昭の「天皇のロザリオ」を取り上げ、ご多分にもれず、いつの間にか「火薬一樽と引き換えに五十人の娘が売られていった」という文章が独り歩きしてしまった。イエズス会とキリシタンの大名の所業を訴えているのが本筋なのに、「五十万

人」は本当かどうかという細部で騒がれているようである。（中略）

その数字の根拠は知る由もないが、引用されている原本をあたるため、国会図書館で徳富蘇峰の「近世日本国史」を探したが、該当箇所は数字がみつからない。》
ともあった。

「しばやんの日々」（2012年02月06日（月）日本人奴隷が大量に海外流出したこととローマ教皇の教書との関係～その3）は次のように書いている。

《大量に日本人奴隷が海外に輸出された事実は、イエズス会の宣教師ルイス・フロイスの記録を読めばわかる。以前私のブログで引用した部分だが、

「薩摩軍が豊後で捕虜にした人々の一部は、肥後の国に連行されて売却された。その年、肥後の住民はひどい飢饉と労苦に悩まされ、己が身を養うことすらおぼつかない状態になったから、買い取った連中まで養えるわけがなく、彼らはまるで家畜のように高来（タカ

ク：島原半島）に連れて行かれた。かくて三会（ミエ）や島原の地では、時に四十名が一まとめにされて売られていた。肥後の住民はこれらのよそ者から免れようと、豊後の婦人や男女の子供たちを、二束三文で売却した。売られた人々の数はおびただしかった。」（『完訳フロイス日本史 8』中公文庫 p.268）…1588年の記述

この「おびただしかった」という数字がどの程度であったかは諸説があるが、

「豊後の国の全領民は次のように三分された。その第一集団は、戦争のために死亡し、第二集団は、敵の捕虜となって薩摩や肥後に連行されたのち、羊の群れのように市場を廻り歩かされたあげく売られていった。第三の集団は、疾病や飢餓のために極度の貧困に陥って人間の容貌を備えていないほどであった。」（同書 p.314）…1589年の記述

という記録もあり、数千人レベルではなさそうだ。

太閤検地の頃の豊後の人口が418千人であったことから勘案すると、鬼塚英昭氏が『天皇のロザリオ』という本で書いた50万人説は、豊後以外の人々が奴隷にされていたとしても多すぎると考える。

史料を読む人によってイメージする数字が異なるのだから、1582年（天正10年）ローマに派遣された有名な少年使節団の会話録の中で、彼らが世界各地で日本人奴隷を見て驚愕した記録や、インドのゴアにはポルトガル人よりも日本人奴隷のほうが多かったという記録があることなどからしても、数万人程度は海外に奴隷として送られたと考えるもおかしくはないだろう。

日本人奴隷は鎖につながれて数百人が奴隷船に積み込まれた記述がある。
秀吉の祐筆であった大村由己（おおむらゆうこ）が『九州御動座記』に、秀吉が「伴天連追放令」を出した経緯をまとめている。

「今度伴天連等能き時分と思候て、種々様々宝物を山

と積、…日本人を数百男女によらず、黒船へ買取、手足に鎖を付け、船底へ追入れ、地獄の呵責にもすぐれ、…今世より畜生道の有様、目前之様に相聞候。…右之一宗御許容あらば、忽日本外道之法に成る可き事、案の中に候。然らば仏法も王法も、相捨つる可き事を歎思召され、忝も大慈、大悲の御思慮を廻らされて候て、即伴天連の坊主、本朝追払之由仰出候。」

手足に鎖をつけて、数百人も船に積み込むのはアフリカの奴隸船と全く同じやり方だ。アフリカで実際に使われた 100t クラスの奴隸船は全長が約 30m で 414 人の奴隸を乗せたという記録があるそうだが、船底の 3～4 段のスペースに身動きできない程ぎっしりと詰められた暗くて狭い空間で、何か月もろくな食事も水も与えられずに波に揺られて運ばれていたかと思うとぞっとする。》

また、サンパウロ市に本社を置くニッケイ新聞社は、「日本人奴隸の謎を追って」という題名で 2009 年 4 月 9 日付から 4 月 24 日付で 10 回連載した。

《日本人奴隸の謎を追って = 400 年前に南米上陸
か? = 連載 (1)

= 亜国に残る裁判書類 = 1596 年に売られた日本人

博覧強記でしられた故中岡哲郎さんの『ブラジル学入門』(無明舎、一九九四年、以下『入門』と略)を読み直して、「(日本では)一五五〇年から一六〇〇年までの五十年間、戦火に負われた多くの難民、貧民がポルトガル人に奴隸として買われ、海外に運ばれていた」(百六十四頁)との記述に目が引かれた。

驚くことに、「アルゼンチンのコルドバ市の歴史古文書館には、日本人奴隸を売買した公正証書がのこされている」(百六十五頁)という具体的な内容も記されている。

さっそく『アルゼンチン日本人移民史』(第一巻戦前編、在亜日系団体連合会、〇二年)を調べてみると、確かにある。

同国の古都コルドバ市の歴史古文書館で見られた最初の書類では、一五九六年七月六日、日本人青年が奴隷として、奴隷商人ダイエゴ・ロッセス・デ・リスボアからミゲル・ヘローニモ・デ・ポラスという神父に八百ペソで売られたことになっている。

その日本人青年の属性として「日本州出身の日本人種、フラスコ・ハボン（21歳）、戦利品（捕虜）で担保なし、人頭税なしの奴隷を八百ペソで売る」（同移民史十八頁）とある。残念ながら、日本名は記されていない。

さらに、『日本移民発祥の地コルドバ』（副題「アレンソン・コルドバ州日本人百年史」、大城徹三、一九九七年、以下『コルドバ』と略）によれば、日本人青年は一五九七年三月四日付で、「私は奴隷として売買される謂（い）われはない。従って自由を要求するものである」と起訴したとある。

奴隷として売られてから二年後、一五九八年十一月三日に裁判に勝訴し、無事、自由の身になった。裁判所は、代金の八百ペソを奴隷商人から神父が取りもどす権限を与えている。

「この日本青年は心身共に強健で才能に富んだ傑人と思われ、それなりに他の奴隷に較べて三、四倍の高値で買い取られている」（『コルドバ』十六頁）と考察する。奴隷として売られた人間が、「奴隷ではない」と裁判を起こすこと自体、当時は珍しいだろう。

これが重国初の日本人公式記録であり、それゆえコルドバが「南米日本人発祥の地」だという。》

* * *

「しばやんの日々」は、次のようにも書いている。

《日本の歴史の教科書にはほとんど何も書かれていないので、中学高校時代にはイエズス会の宣教師はキリスト教を広めるためにわざわざ日本にやってきたとしか考えなかったのだが、私がスペインやポルトガル

にわが国を侵略する意図があったことを知ったのは数年前のことである。》

「日本人奴隷」や「侵略」については、中公の「日本の歴史」などでよんでいたのかもしれないが、記憶しているのは、「しばやん」とおなじように「布教」

だけである。「秀吉はスペインの日本征服の魂胆を見抜き、修道士はその為に送り込まれたスパイだと認識していることをザアリヤーニはプラドに警告しているわけである」ともあり、秀吉の朝鮮出兵もこのことと関係があり、「単なる征服欲」ではなかったようだ。

あとがき

◆数年前、断捨離という言葉が流行った。欲を断ち無駄を捨て執着から離れるという行法哲学には縁遠いが、せめて不要物は捨てようとその頃思っていた。が、これがなかなか進まない。執着心が邪魔をする。我楽多ばかりなのだが。(B)

◆登山道でクマと遭遇するケースは極く稀にしか聞かないが、クマが山菜採りを襲う事件が跡を絶たない今年は、どうも気持ちが乗らない。山へ行かなければ原稿だってネタ切れになりそう。(K)

◆毎年のように8月のお盆を過ぎると台風のシーズンがやってくる。この時期、出穂を終えた稲穂に実が結実しはじめ、首が重く垂れてくる時期でもある。台風の進路が東北地方の、しかも秋田を通過するという予報が出ると、イネが風雨でベターっと田んぼに倒伏しないか、毎年、それこそ気が気でない精神状態なり、予想進路が1ミリでも当地区からずれてくれるように願うことになる。それは人として自然な思いだと思うが、見方を変えると、他の県へ逸れてくれと願う利己的な願いでもあり、自分の未熟さを知ることにもなる。(T)

◆菅江真澄は、蟹気楼について「山市」とも書いている、とIさんに教えられた。「睦月のなから斗八龍湖の氷上にたちて雪中に山市あるを見き…」(J)

「海市」 第5号

2016年9月9日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方